



湖西の山・リトル比良の山中は巨石が点在する(寒風峠と滝山の間にて)

近江の山にはいかにも靈力を潜ませた風の巨石が多くあり、古代人の敬虔な祈りを彷彿とさせる。リトル比良の愛称で親しまれている湖西の岳山から岩阿沙利山に至る山中にも目を剥くばかりの巨石が点在し、麓の古墳群との関わりを思わせるのだが、デルタ地帯である安曇川中流域にあたる高島市安曇川町三尾里の安閑神社にも一つの巨石が安置されている。山の巨石に関連するものかどうか、どこからきたのか、いつからここにあるのか、確かとしたことは分からないそうだが、一つは高さ2mほどの大きな石。一つは何か意味ありげな文様が彫られた石だ。

近江は石の国……



田植え前の水田。水田に周囲の風景が映って美しい(高島市鶏川にて)

色白の美しい女である大井子は、《田などもなくさん持つて、自分で作っていた》。ところが水争いがあり、村人たちは大井子の田に水がいかないようにした。水田に水が来なければ、困る。大井子は夜の間に2mほどもある巨石を一人で動かして自分の田んぼに水が来るようにした。それにより村人の田には水がいなくなってしまうのだろうか。これでは困る。村人はこの巨石をどかしたいが、どかすには百人ほどの人手がいる。と聞いて、そんなにたくさんの人間を田んぼに入れたのでは田んぼがめちゃめちゃに踏み荒らされてしまう。村人たちは大井子に謝り、石をどかしてもらった。その後、水争いはなくなり、《この石は大井子の水口石といって、後代まで残っていた》と語られる。

※1「だけやま」とも呼ぶ

# 大力物語

菊池 寛



リトル比良から琵琶湖を望む

男と女に区別はあるが差はない  
違うのは個人の資質だ  
そこが認識されている社会は心地よく  
文化度が高い、社会というのだろうか  
賢い頭脳も優しい心も資質の一つ  
もちろん力持ちも資質である

古代のロマンを楽しむ

この話は菊池寛の創作話ではない。元は鎌倉時代、橘成季が撰んだ『古今著聞集』という説話集に所収された話である。ということは、鎌倉時代にはすでにこの辺りに巨石があつたわけだが、大井子の水口石が今、ここにあるこの石かどうかは、正確に言えば分からない。が、この石を誰かがここに安置し、いつのころからか、これを「大井子の力石」と呼び、近隣の村人は大切に崇めるようになっていった。故事来歴は分からないが、人々の尊崇を得るといふことはこの石に何かオーラがあつたに違いない。



安閑神社の前に置かれた二つの巨石(右が大井子の水口石)

ちなみに並んで安置してある石に刻まれた文様は神代文字とも言われている。神代文字というのは漢字伝来以前の古代日本で使われていたという日本固有の文字で、全国にいくつもあり近江に残るこの文字もその一つ、とされる。これが文字なのか絵なのかは未だ解明されてはいないが、文字であれば絵であれ、これを彫りつけた人物はこの文様にどんな願いを託したのだろう。そもそもこの安閑



安閑神社から北西約2kmに位置する継体天皇の父・彦主人王(ひこうしおう)御陵

神社のある一帯は安閑天皇の父である継体天皇誕生の伝承地であることもあり、長閑な田園風景と相俟つて、見える風景すべてが古代のロマンに彩られて見えてくる。

菊池寛は神代文字にはふれていないが、大井子の大力エピソードをもう一つ紹介している。相撲の節会に召されて京の都に上る途中の越前の《無双の強者》佐伯氏長が近江高島郡石橋を通りかかったとき、水くみから帰る大井子を見かけて、今というナンパをしようとする。ところが、逆に大力の大井子に、あなたはそんな大事な場所に行ける器量はないから鍛えてあげる、と言われ《三七日逗留》させられて鍛えられた、という話だ。

港町海津の風情

巨石を一人で動かす、大の男を鍛え直すほど大井子は大力であつたが、『近江の国にはもう一人大井子などよりもっと有名な大力の女がいた。それは近江のお兼である』

この女は、琵琶湖に沿うたかいづの浦の遊女である。彼女は、ひさしくある法師の妻となつてた。

※2 三七日=21日

うかは分からないが、いかにも港町海津に伝わる話である。

海津は古くから北国と畿内を結ぶ交通の要衝地で、宿駅でもあつたから、遊女の話も残つただろうし、旅の僧を泊めるところ、という意味の「旦過」という言葉が小字名で残つたりもしたのであろう。敦賀から「七里半越え」を経て海津に着いた物資や人はここから船で大津に行き、大津から京へと上つていったのだ。

海津が最も繁栄したのは江戸時代前期。現在、マキノ東小学校になっているところは当時は内湖で、その辺りだけは加賀藩の飛び地だったのだが、江戸幕府は軍事的、かつ、その経済性から海津を直轄地にしてた。湖岸沿いの通りは船間屋や旅籠などが建ち並ぶにぎわいの町であつたのだ。今、そのにぎわいはないけれど、海津の家並みにはそのさんざめさがどこから聞こえてきそうな風情が漂う。湖岸に出ると、江戸時代初めの代官・西与一左衛門の尽力でできた波よけの石積みが続く、海津に今なお美しい風格を与えている。



福善寺の境内にひっそりと安置されている「近江のお兼」の供養塔

も手に負えないでいたのだが、高い足駄を履いていたお兼が引き綱を踏みつけて馬を止めたのである。お兼のエピソードは芝居の所作事などにもなっていて、海津の福善寺にはお兼の供養塔という石塔がある。お兼が実在したかど



海津の浦の美しく透き通った湖水。馬も人もひと息つきたくなる水辺だ

お兼は法師が浮気をしていると耳にして、懲らしめに法師の弱腰を大力で締めて、気絶させてしまふほどの力持ちだった。

彼女の大力が世に知られるようになったのは、暴れる馬を足一本で止めてしまったことだった。京に向かう東国武士が馬の脚を湖水で冷やしてやって来たところ、馬が急に暴れ、走り出してしまった。誰



海津の湖岸には東浜、西浜合わせて1163mの波よけの石積みが築かれている

《明るい結末》を好んだ  
菊池寛

菊池寛はこのあと、性悪の美濃の大力女・美濃みの狐きつねと、小柄だが姿形がしなやかで心映えもいいた張の大力女の対決話や、その尾張の女が、上司に横取りされた夫の着物を取り返した話（ただ、着物は取り返したのだが、夫の両親は上司を負かしたような女を妻にしていたのではこれから先、自分たちにはどんな迷惑がふりかかってくるかもしれない、ということ）で、女を離縁してしまうが、その離縁された女が自分をバカにする人々が乗った船を陸の上に向けてしまった話、盗人に人質にされた女が実は大力女で、それに気づいた盗人が青くなつて逃げ出した話、そして男の力持ちとして、比叡山さいごう西塔さいとうの実因僧都じついんそうずという僧が、宮中のお勤めの帰りに遭遇した追いはぎを持ち前の大力でヘトヘトに疲れさせてしまう話などを入れている。いずれも、話はめでたしめでたし、で終わる。

菊池寛の作品は《たいてい明るく締めくくられている》。人間、やっぱり「善」をよしとし、それで安心もする。近江の説話の中にその片鱗を見つけた菊池寛の文化度を垣間見る作品である。

菊池寛『大力物語』

『ちくま日本文学027「菊池寛」』筑摩書房  
2008年11月10日発行

※本稿は右記書籍によった

「大力物語」の風景を歩く

◆菊池 寛

1888(明治21)年香川県高松市生まれ。京都帝国大学在学中、第三次、第四次「新思潮」同人として参加。1916(大正5)年大学卒業後、時事新報社社会部記者を経て小説家となる。代表作は戯曲『父帰る』、小説『無名作家の日記』『忠直卿行状記』『恩讐の彼方に』『真珠夫人』など。1923(大正12)年に雑誌「文藝春秋」を創刊し実業家としても成功する。その後、文藝家協会(現・日本文藝家協会)の設立、芥川賞、直木賞、菊池寛賞の設定、著作権の擁護、作家の地位向上など数々の功績を残す。1948年没。

◆「大力物語」と安閑神社、福善寺

「大力物語」に登場する大井子と近江のお兼にゆかりのある地が湖西に伝わっている。安曇川町の安閑神社には大井子の力石(水口石)と呼ばれる巨石が祀られている。また、近江のお兼の供養塔といわれる石塔がマキノ町海津の福善寺の境内にある。「近江のお兼」は日本舞踊や長唄ではよく知られた演目になっている。

アクセス

- ▼安閑神社/JR安曇川駅下車、徒歩約10分
- 福善寺/JRマキノ駅下車、徒歩約20分



Profile 文・写真 ●西本柵枝(にしもと・なきえ)

『東海自然歩道』『ひとり歩きの日陽山陰』など旅の案内書や紀行エッセイ、詩集などの著書。紀行エッセイには本誌連載の「近江の文学風景」をまとめた『鳩の浮巢』(サンライズ印刷出版部)『湖の風回廊』(東方出版)などがあつた。KEIBUN文化講座講師・日本ペンクラブ会員・日本詩人クラブ会員。